

新石器時代晩期から鉄器時代にかけて フィリピン北部と台湾南部の土器の関連性について —特に矢羽根状刻み目紋土器について—

田中 和彦（上智大学アジア文化研究所非常勤講師）

はじめに

ルソン島北端部と台湾本島南端部は、その間にバタン諸島 (Batan Islands) 10 島、バブヤン諸島 (Babuyan Islands) 5 島を飛石のように配し、約 370km 程の隔たりのある。この隔たりの距離や荒海として名高い両島の間の海は、古来、大きな障壁であったにもかかわらず、先史時代より人々はこれを乗り越え、歴史時代に至るまで、頻繁に交流を続けてきた。

こうした交流のうち、新石器時代の交流については、特に P. ベルウッド (Bellwood) が早い時期からオーストロネシア語を話す人々 (Austronesian) が、南中国から台湾を経由してフィリピンに達し、フィリピンからボルネオ島やインドネシアの島々、そして太平洋諸島へと拡散したことを論じた (Bellwood 1985, 1997)。彼の想定するオーストロネシア語を話す人々の動きの中に B.C.3000 年頃に台湾からフィリピンへの移動があった (Bellwood 1997)。さらに、このベルウッドの下で学んだ台湾人洪曉純は、自身が発掘調査したルソン島北部カガヤン (Cagayan) 州、ナグサバラン (Nagsabaran) 遺跡の新石器時代の文化層から出土した赤色スリップ土器が、台湾東海岸に所在する新石器時代の潮来橋遺跡の赤色スリップ土器に酷似することを両遺跡出土土器の図と写真を対比して示した (Hung 2005:Fig.4,15)。

一方、歴史時代のスペイン時代については、マニラのスペイン人居留地であったイントラムロスにおいて、日本の肥前磁器が出土していることを初めて明らかにした野上建紀が、マニラに日本から肥前磁器を運んだのは、中国の唐船であり、長崎から鄭氏の拠点であった台湾あるいはマカオを経由したものであったことを論じた (野上他 2005)。

このように、新石器時代とスペイン時代については、具体的な資料に基づいて、台湾とルソン島との関係が

明らかになってきた。しかるに、新石器時代の後の鉄器時代におけるルソン島と台湾の関係については、具体的資料をもってほとんど論ぜられてこなかったといえる。

一方、鉄器時代のフィリピンの土器と周辺地域の関連については、1960 年代にソルハイム (Solheim) がフィリピン中部マスバテ (Masbate) 島のカラナイ (Kalanay) 洞穴 (図 1) 出土土器とタイのシャム湾のサムイ (Samui) 島 (図 1) 発見の土器の類似性を指摘し (Solheim 1964b)、広い地域の交流が指摘されてきた。そして、近年早稲田大学の山形眞理子氏が発掘調査したベトナム中部カインホア省のホアジェム (Hoa Diem) 遺跡出土の土器は、カラナイ洞穴出土の土器やサムイ島発見の土器と酷似することが明らかになった (山形 2010) (図 2)。また、東南アジアの玉製品の非破壊化学分析が台湾中央研究院地球科学研究所の飯塚義之によって進められパラワン島タボン (Tabon) 洞穴群 (図 1) の中の金属器時代の洞穴から出土した玉製品の玉の素材が台湾の豊田 (図 1) 産であることが明らかになった (飯塚 2010)。

ところが、筆者らの調査を行っているルソン島北部の鉄器時代の土器は、どの地域と関連があるのか不明瞭なままであった。

そのような状況にある中で、筆者は、2010 年 3 月～4 月にかけて台北の中央研究院に 1 ヶ月滞在して研究する機会を得、台湾南部高雄県に所在する鳳鼻頭遺跡の踏査を行った。その折、当該遺跡にカガヤン川下流域のバガッグ (Bangag) I 貝塚において筆者がかつて検出した土器と類似する紋様を持った土器が存在することに気がついた。それが、本稿で取り扱う矢羽根状刻み目紋土器である。

本稿では、まずルソン島北部における良好な層序を持った鉄器時代遺跡であるバガッグ I 貝塚の調査成果

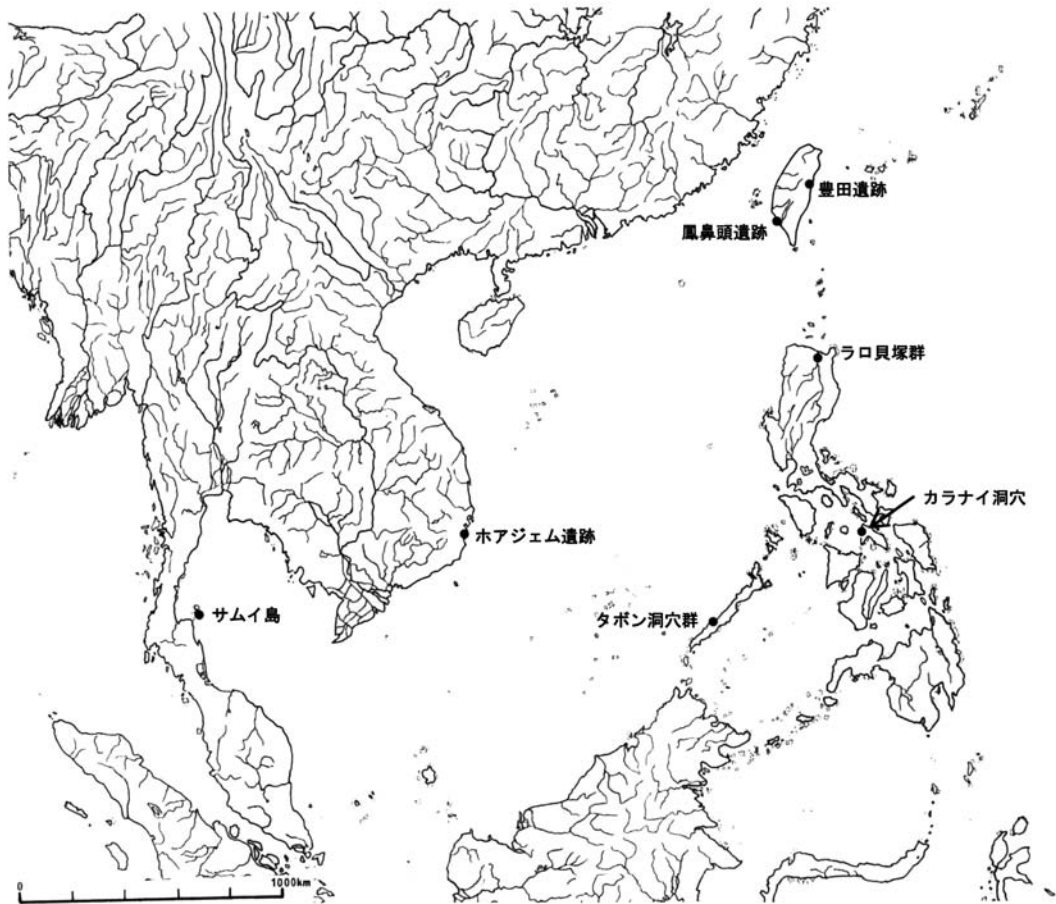


図1 本稿で扱う主要遺跡の分布図

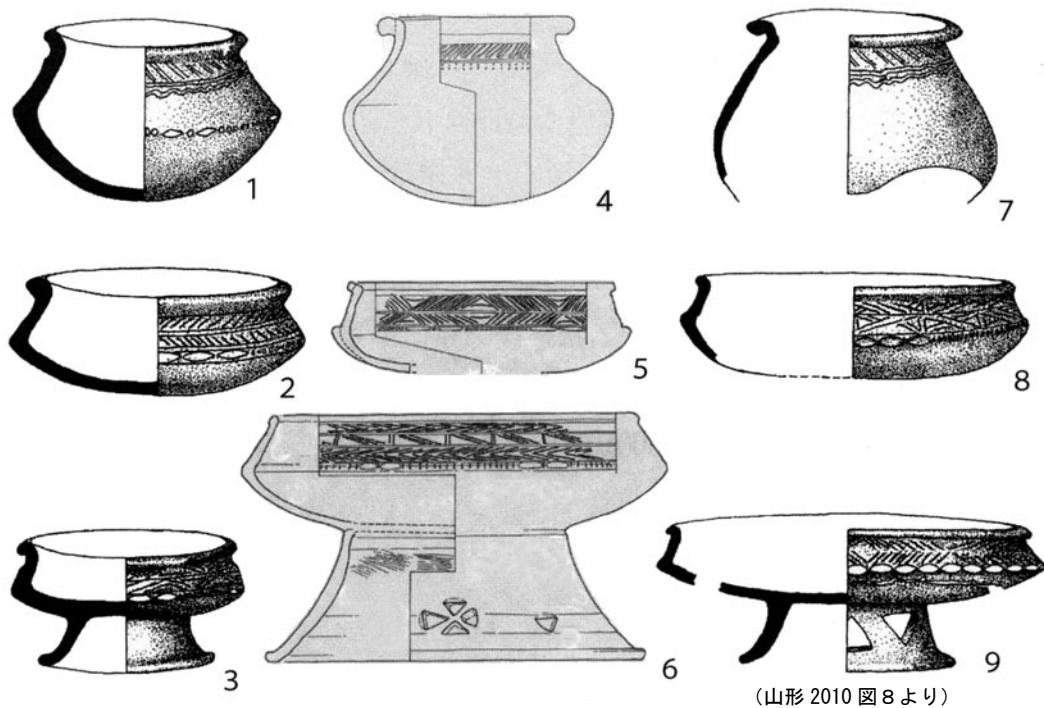


図2 カラナイ (7～9)、ホアジェム (4～6)、サムイ (1～3) の土器比較

(いずれも口径 4: 10.2cm, 5: 15.0cm, 6: 20.2cm, 1-3, 7-9 は正確なサイズ不明)

(4-6 ホアジェム遺跡調査団作成実測図、1-3, 7-9 Solheim 1964b より転載)

を紹介し、その上で、同貝塚から出土した矢羽根状刻み目紋土器の資料を出土層位と対比させて検討する。その上でカガヤン川下流域の他の貝塚から出土した矢羽根状刻み目紋土器の資料を概観する。次に、張光直による鳳鼻頭遺跡の発掘資料の中の矢羽根状刻み目紋土器を概観する。そして、筆者が、鳳鼻頭遺跡で採集した矢羽根状刻み目紋土器の資料を紹介する。

そして、最後にカガヤン川下流域出土の資料と鳳鼻頭遺跡採集資料の類似点と相違点を検討してみたい。

1. ルソン島北部における鉄器時代貝塚バガッグ I 貝塚の発掘調査と出土土器

1-1. バガッグ I 貝塚の位置、立地、規模

本貝塚は、カガヤン川の河口から川を南へ30kmほど溯ったカガヤン川の西岸（左岸）に位置している（図3）。この地点でカガヤン川は、東方からのびてきた石灰岩丘陵にぶつかり、丘陵の先端部を東西に分断してさらに北へと流れている。石灰岩よりなる丘陵を分断したため、カガヤン川はここで川幅をせばめ、東側に膨らんだ半円弧を描いて流れる。半円弧を描いた部分での流れの速さは、東岸沿いでは速く、西岸沿いでは遅い。そのため、西岸において土砂の堆積が進行し、氾濫原とも呼べる比較的平坦な地形が形作られている。本貝塚は、この氾濫原上に形成された貝塚である。

本貝塚の平面形は、東側の東西方向の辺を底辺とするする不整形台形である（図4）。この底辺の長さは、約147mである。一方、上辺となる辺は、北西から南東に西高東低に傾いており、約112mの長さである。そして、この両辺を結ぶ2辺の長さは、各々141mと90mである。また、この大きさから推定される面積は、1171.1㎡である。

1-2. バガッグ I 貝塚の層序

本貝塚の堆積は、第I層から第XII層までの12の層に大きく分類される（図5）。これらは、全て遺物包含層だが、第I層から第XI層までは貝を含み、第XII層は貝を含まない。貝を含む層のうち、表土層下の第II層から第V層までの各層は、第IV層を除き比較的層厚が厚い。それに対して、第VI層から第XI層までの各層は、比較的層厚が薄い。また、第II層は、

層中にいくつかの特徴の異なる層が見られたため、五つの層に細分され、第X層は、破碎貝層中の土色や混入物が異なるため、六つの層に細分された。以下、各層の概要を記す。

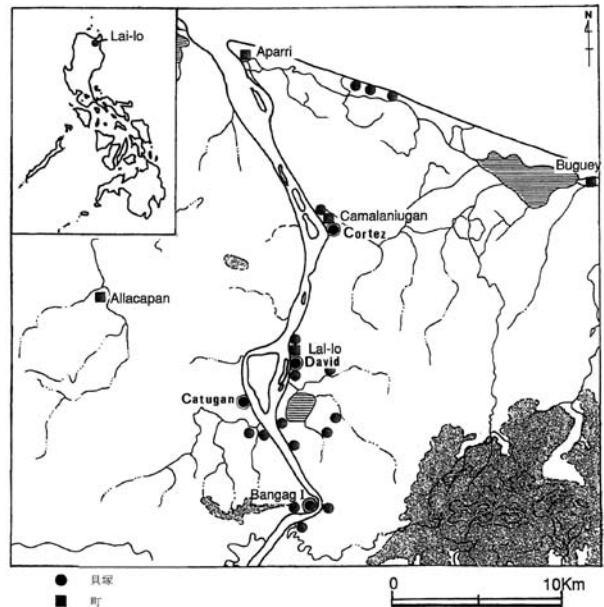


図3 ルソン島北部カガヤン川流域ラロ貝塚群
矢羽根状刻み目紋土器出土遺跡分布図

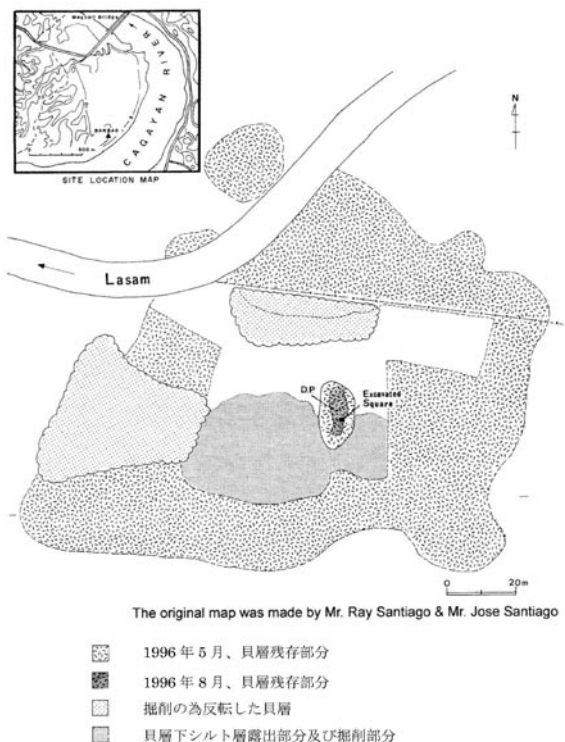


図4 バガッグ I 貝塚平面図及び発掘坑位置図

すなわち、第Ⅰ層：混貝黒色土層（表土層）、第Ⅱ-①層：黒色土混入貝層、第Ⅱ-②層：純貝層、第Ⅱ-③層：黒色土混入破碎貝層、第Ⅱ-④層：黒色土混入破碎貝層、第Ⅱ-⑤層：黒色土混入貝層、第Ⅲ層：純貝層、第Ⅳ層：黒色土混入破碎貝層、第Ⅴ層：純貝層、第Ⅵ層：混貝黒色土層、第Ⅶ層：黄褐色シルト混入破碎貝層、第Ⅷ層：混貝暗褐色土層、第Ⅸ層：褐色土混入貝層、第Ⅹ-①層：黒色土混入破碎貝層、第Ⅹ-②層：黒色土混入破碎貝層、第Ⅹ-③層：炭化物混入破碎貝層、第Ⅹ-④層：炭化物層、第Ⅹ-⑤層：混土破碎貝層、第Ⅹ-⑥層：黒色土混入破碎貝層、第Ⅺ層：暗黄褐色シルト混入貝層、第Ⅻ層：暗黄褐シルト層である。

1-3. バガッグⅠ貝塚出土の土器以外の遺物

本遺跡の時代を考えると、重要な遺物は、第Ⅵ層出土の鉄片（写真 1-5,6）である。これは黒色土器の鉢形土器の内面に付着していたものである。また、第Ⅱ層からは、鉄滓（写真 1-3,4）が出土している。

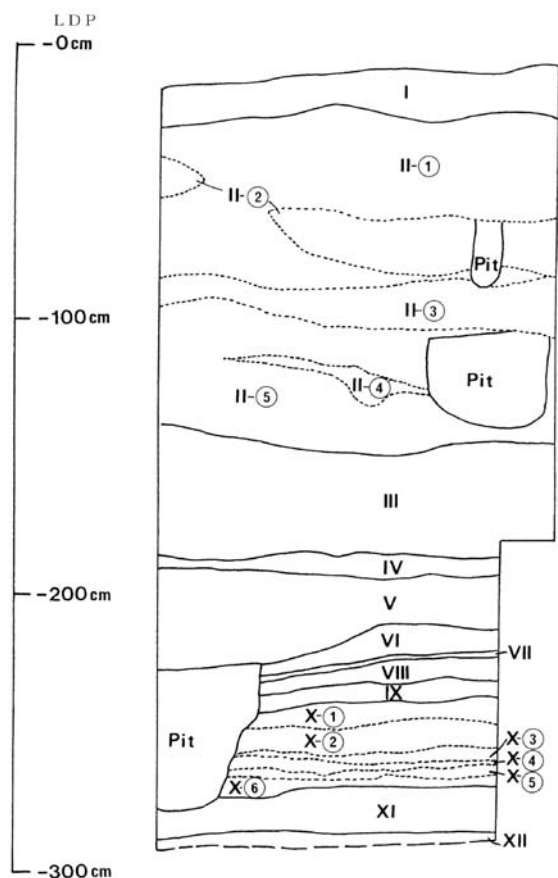


図5 バガッグⅠ貝塚発掘坑西壁断面図

また、第Ⅱ層からは、完形品 73 点、破損品及び破片 9 点のガラスビーズ（写真 1-2）が、第Ⅲ層からは、破損品 1 点のガラスビーズが出土している。また、第Ⅱ層からは猪の牙（写真 1-1）が出土している。

1-4. バガッグⅠ貝塚の出土遺物から見た時代と C14 年代測定値

先に見たように、本貝塚第Ⅵ層からは土器に付着した鉄片が出土し、第Ⅱ層からは鉄滓が出土した。一方、交易磁器の出土は、いずれの層からも全く見られなかった。こうしたことから、本貝塚第Ⅵ層から第Ⅱ層までは鉄器時代に属すると考えられる。

また、本遺跡の C14 年代測定値については、九州大学大学院博士課程の三原正三氏によって資料の処理が行われ、名古屋大学の加速器によって年代が測定された。資料は、第Ⅱ層、第Ⅵ層、第Ⅷ層、第Ⅹ層、第Ⅺ層から出土した動物骨が用いられ、各層各々 1 点ずつ 5 点の C14 年代測定値が測定された。

各々の層の年代測定値は、第Ⅱ層（-70 ～ 90cm）出土の動物骨が、1750 ± 30.B.P.（補正年代：1735 ～ 1560B.P.：100 %）（NUTA2-7703）で、第Ⅵ層（-210 ～ 220cm）出土の動物骨が、1915 ± 30B.P.（補正年代：1930 ～ 1815B.P.：92.1 %）（NUTA2-7704）で、第Ⅷ層（-222 ～ 227cm）出土の動物骨が 1840 ± 30B.P.（補正年代：1835 ～ 1705B.P.：92 %）（NUTA2-7705）で、第Ⅹ層（-255 ～ 265 cm）出土の動物骨が、2040 ± 40B.P.（補正年代：2115 ～ 1920B.P.：97 %）（NUTA2-7706）で、第Ⅺ層（-270 ～ 280cm）出土の動物骨が、1965 ± 40B.P.（補正年代 1990 ～ 1855B.P.：90 %）（NUTA2-7707）（三原他 2005:176）である。

1-5. バガッグⅠ貝塚出土の土器

次に本稿で取り扱う矢羽根状刻み目紋土器が、出土土器群全体の中でどのような位置にあるかをバガッグⅠ貝塚の層の中で最も豊富な器種が出土した層の一つである第Ⅺ層出土の土器群を例に見てみたい。

第Ⅺ層出土の土器群は大きく無紋土器（図 6）と有紋土器（図 7）に分けられる。このうち無紋土器は、甕形土器（図 6-1～4）と鉢形土器（図 6-5～11）、蓋（図 6-12）に分けられる。

甕形土器は、口縁部が外反し、外側に肥厚するが口



1. 第Ⅱ層出土イノシシの牙



2. 第Ⅱ層出土ガラスビーズ



3. 第Ⅱ層出土鉄滓



4. 第Ⅱ層出土鉄滓



5. 第Ⅵ層出土黒色土器付着鉄片



6. 第Ⅵ層出土黒色土器付着鉄片（拡大写真）

写真1 バガッグⅠ貝塚出土遺物

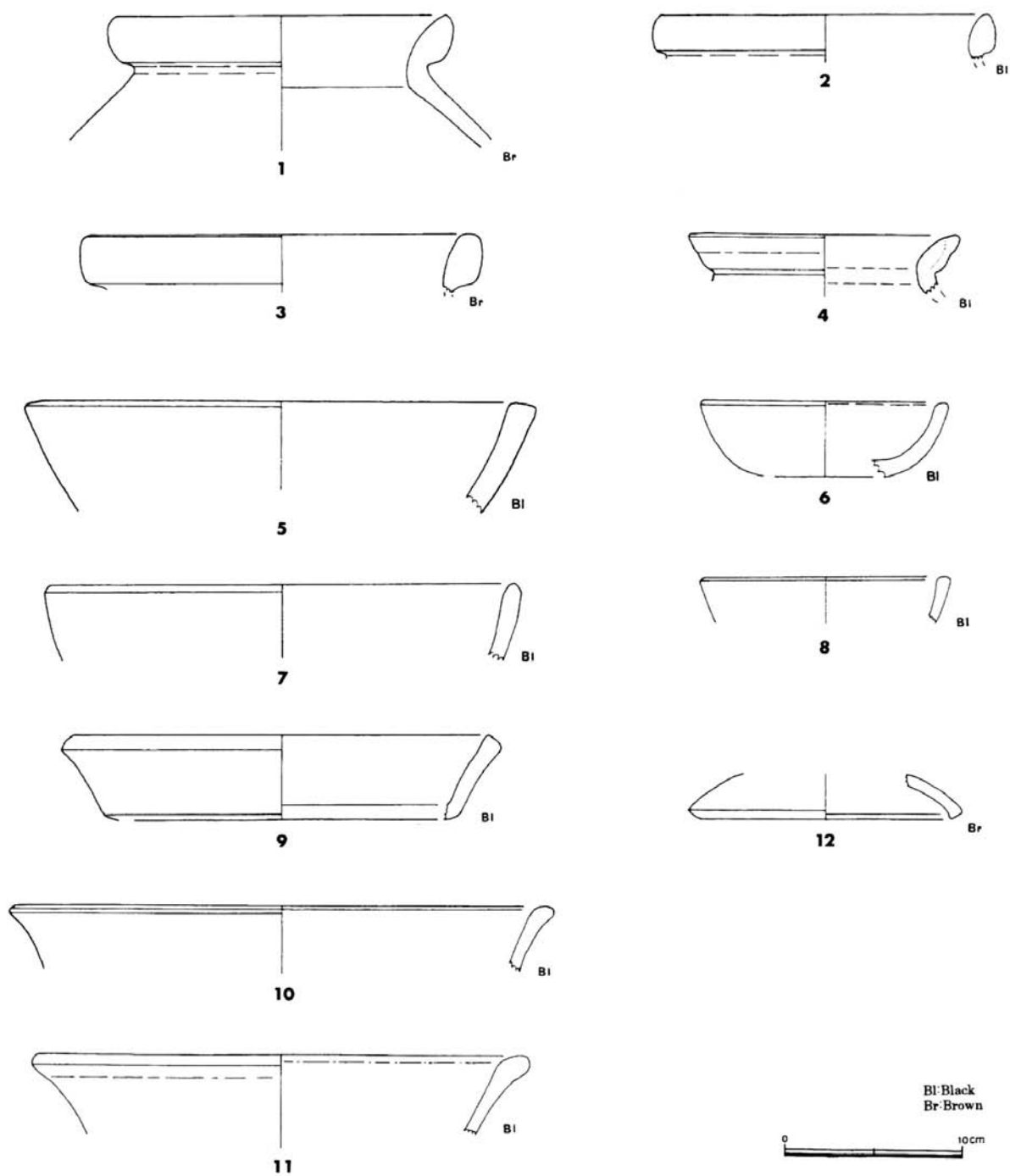


図6 バガッグⅠ貝塚第Ⅺ層出土無紋土器

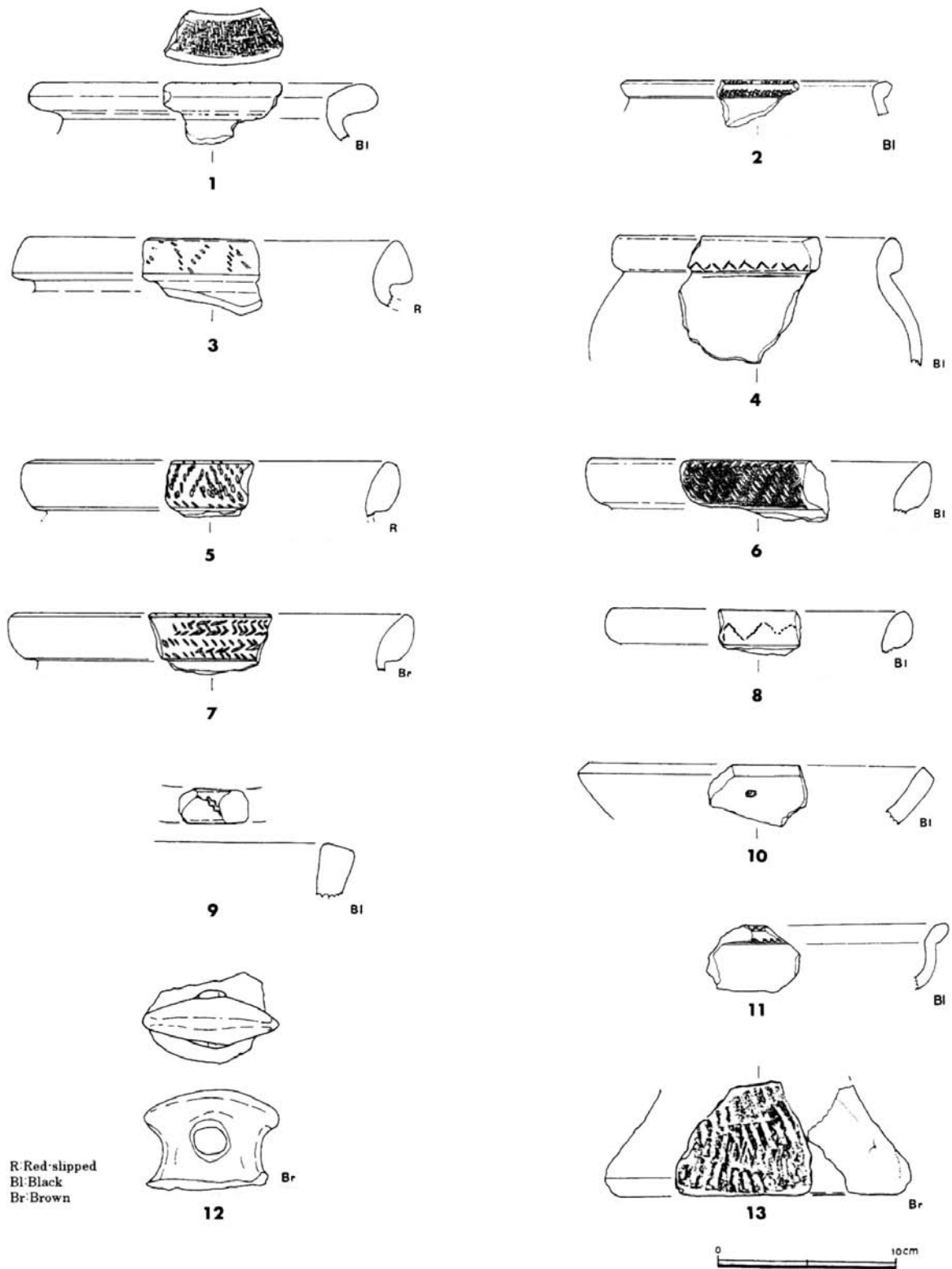


図7 バガッグ I 貝塚第 XI 層出土有紋・有孔土器

唇先端部は薄手になるもの(図 6-1,2)、口唇先端部も厚手で幅広く、重厚な口縁部を作るもの(図 6-3)がある。また図 6-4 は、口縁部外面中位がふくらんでいる。

これら無紋の甕形土器には、褐色のもの(図 6-1,3)、黒色のもの(図 6-2,4)の両方がある。

一方、鉢形土器は、口縁部が内湾するもの(図 6-5~8)と外反するもの(図 6-9~11)がある。内湾するものは、口唇頂部の形態によって、平坦なもの(図 6-5)、丸味をもつもの(図 6-6,8)、尖るもの(図 6-7)に分けられる。

一方、外反するものには、厚手で平坦な口唇頂部をもち胴部も厚さの差があまりないもの(図 6-9)、口唇部が外側に張り出すもの(図 6-10,11)がある。また、無紋の鉢形土器は全て黒色土器である。

有紋土器と有孔土器は、大きく甕形土器(図 7-1~8)、鉢形土器(図 7-9~11)、蓋のつまみ(図 7-12)、支脚の脚部(図 7-13)に分けられる。甕形土器は、口縁部が頸部で強く外側に屈曲するもの(図 7-1,2)とゆるやかに外反し、外面が肥厚するもの(図 7-3~8)がある。甕形土器に施される紋様は、刻み目紋(図 7-1,3~7)と沈線紋(図 7-2)と貝殻腹縁押捺紋(図 7-8)である。強く外側に屈曲する甕形土器の刻み目は、口唇頂部の平坦面に施され、ゆるく外反し外面が肥厚するものの刻み目は、肥厚した外面全体に施され連続山形紋を作るもの(図 7-3)、肥厚部分の下部のみに連続山形紋を作るもの(図 7-4)斜行紋を作るもの(図 7-5,6)矢羽根状模様を作るもの(図 7-6)がある。一方、貝殻腹縁押捺紋は、押捺紋を連続して連続山形紋を作出している(図 7-8)。

一方、これら有紋の甕形土器には黒色のもの(図 7-1,2,4,6,8)、褐色のもの(図 7-7)、赤色スリップのもの(図 7-3,5)がある。

一方、有紋の鉢形土器は、平坦な口唇頂部に貝殻腹縁紋をもつもの(図 7-9)と口唇部内面に十字状に交互に刻み目をもつもの(図 7-11)がある。また、有孔の鉢形土器(図 7-10)もある。これら有紋・有孔の鉢形土器は全て黒色である。一方、有孔の蓋のつまみは褐色であり、外面に叩き痕を有する支脚も褐色土器である。

以上見たように矢羽根状刻み目紋をもつ甕形土器は、多様な刻み目紋の中の一つのパターンである。

2. バガッグ I 貝塚における矢羽根状刻み目紋土器の出土層位と土器の型式学的変化

2-1. 矢羽根状刻み目紋土器の出土層位

先に見たようにバガッグ I 貝塚遺跡は、第 I 層~第 V 層の各層が第 IV 層を除き比較的層厚が厚く(第 IV 層を除き各層の層厚は 30cm 以上)、第 VI 層~第 XII 層の各層が比較的層厚が薄い(第 XI 層が最大層厚 20cm である他は、いずれも 20cm 未満)。これらの層のうち、矢羽根状刻み目紋土器は、第 VI 層から第 XII 層までの堆積層下半部からのみ出土した。

2-2. 矢羽根状刻み目紋土器の器種

次に器種ごと、層ごとに出土例を見ていきたい。本貝塚出土の矢羽根状刻み目紋土器の器種は、甕形土器が 2 種と鉢形土器が 1 種である。

2-3. 矢羽根状刻み目紋甕形土器と鉢形土器の形態と点数

矢羽根状刻み目紋甕形土器は、形態上の特徴から、口縁部内側の輪郭が外に湾曲するとともに、口縁部外面が肥厚し、頸部で締まる形態を持つもの(A 類)(図 8-1~3,6) 4 点と口唇部が内面に肥厚し、口唇先端頂部が平坦で、口唇先端部から外側に開いていく輪郭を持つもの(B 類)(図 8-4) 1 点に分けられる。

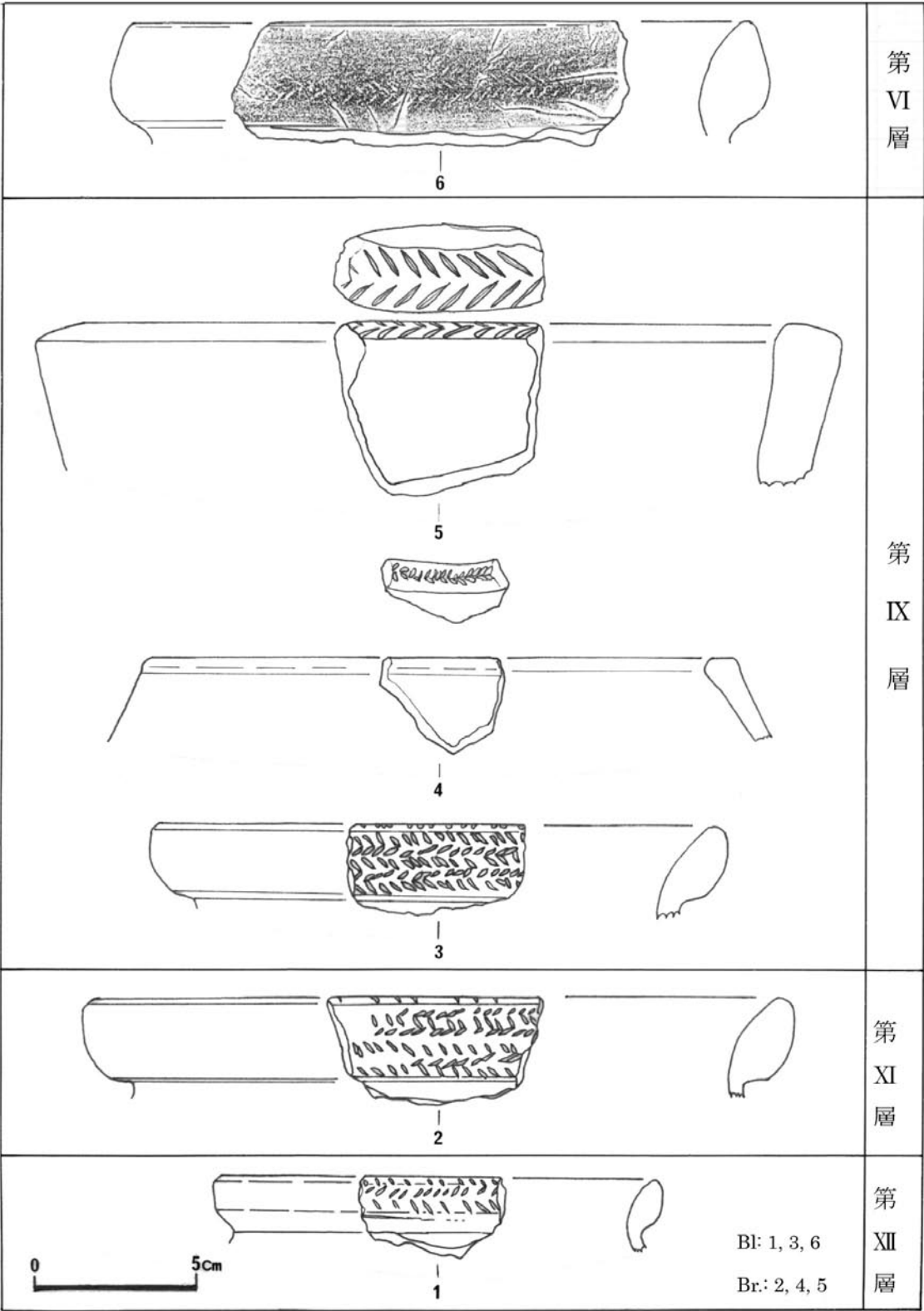
一方、鉢形土器は、口唇先端部が平坦で、内面が僅かに肥厚した後、胴下部に向って内湾する輪郭を持ち、外面は口唇部からまっすぐにすばまるもの(図 8-5) 1 点である。

2-4. 矢羽根状刻み目紋甕形土器(A 類)の出土層位と出土例

矢羽根状刻み目紋甕形土器(A 類)は、第 XII 層から 1 点、第 XI 層から 1 点、第 IX 層から 1 点、第 VI 層から 1 点の計 4 点が出土している。表面の色調は、第 XII 層、第 IX 層、第 VI 層出土のものが黒色で、第 XI 層の出土ものが褐色である。

各々の資料について、下の方の層から形態上の細かな特徴と紋様の特徴を見ていきたい。

第 XII 層出土のもの(図 8-1)は、やや小ぶりなもので、口縁肥厚部分の厚みも薄く、外面の中央部分が面を取り平坦になっている。刻み目は、肥厚部分



(1 ～ 6: 筆者原図)

図8 バガッグI貝塚出土矢羽根状刻み目紋土器と出土層位

全体に施され、横位に3段の斜位の刻み目が連続して施されている。最上段と第3段の刻み目は、右下りで、その間の第2段目の刻み目は、左下りである。

第XI層出土のもの(図8-2)は、口唇先端部がやや丸味を持ち、比較的平坦で、口縁部全体が外側に肥厚するものである。刻み目は、口唇先端部と肥厚した口縁部外面に上から下まで施されている。紋様は、横位に6段の斜位の刻み目が連続的に施され、段ごとに刻み目の傾斜方向が変わることによって矢羽根状の紋様を形作るものである。すなわち、上から1, 3, 5段目が左下りの刻み目になり、2, 4, 6段目が右下りの刻み目になる。また、1段目から3段目の刻み目及び4段目から6段目の刻み目は、接するほど或いは切り合ってほどこされているが、3段目と4段目の間はやや間隔があき、3段目の刻み目と4段目の刻み目は、接するものや切り合うものがない。これは、横位の3段の刻み目が単位となっていることをうかがわせるものとも見ることができる。また、上3段の紋様は、破片左端部分では施されていない。また、この部分での最上段の刻み目は、2段目、3段目の刻み目より刻み目二つ分ほど早くに施文されなくなっている。また、5段目の刻み目も破片左から4個目の刻み目か左端の刻み目まで、施文がなされていない。

第IX層出土のもの(図8-3)は、口唇先端部が丸味を持ち、口縁部全体が外側に肥厚するものである。紋様は、口唇頂部と肥厚した口縁部外面に施され、口縁部外面の紋様は、横位に5列の斜位の刻み目が肥厚部分の上から下まで施され、段ごとに刻み目の傾斜の方向を変えることによって矢羽根状の紋様を形作っている。すなわち、第1, 3, 5段目の刻み目が右下りで、第2, 4段目の刻み目が左下りである。

第VI層出土のもの(図8-4)は、口縁部外面が肥厚し、頸部ですばまる点は、第XI層出土資料、第IX層出土資料に類似するが、口唇頂部の幅が約2mmと狭くなる点は、異なっている。また、最も厚くなる部分が外面肥厚部分の中央よりやや下よりにあり、その部分での厚さが20mmと第IX層出土資料や第XI層出土資料より厚くなっている。紋様は、肥厚した外面全体ではなく、最大肥厚部分にゆるい稜が入り、その稜を中心に稜の上下に3段の斜位の刻み目が施されている。刻み目の傾斜方向は、第1段目と第3段目が左下りで、第2段目が右下りである。

2-5. 矢羽根状刻み目紋甕形土器(B類)の出土層位と形態、紋様上の特徴

矢羽根状刻み目紋甕形土器(B類)は、第IX層から1点出土している(図8-4)。口唇先端部から胴部に向って開いてゆく形態を持つ甕形土器である。口唇先端部では、内面部分が肥厚し、頂部は平坦になっている。紋様は、この口唇頂部の平坦部分の中央に外側から見て内面側に左下りの斜位の刻み目を1列、外面側に左上りの斜位の刻み目を1列、各々の刻み目の左端が接するように施すことによって矢羽根状の紋様を形作っている。また、施された刻み目の長さは、2～4mmと、A類の甕形土器に施される刻み目よりも短い。

2-6. 矢羽根状刻み目紋鉢形土器の出土層位と形態、紋様上の特徴

矢羽根状刻み目紋鉢形土器は、第IX層から1点出土している。褐色土器である。形態は、先に記したように口唇先端頂部がやや丸味をもつものの比較的平坦で、内面は、口唇先端部でわずかに肥厚した後、胴下部に向って内湾する。一方、外面は、口唇部からまっすぐにすばまる形態を持っている。また、口唇肥厚部分での厚さは、2cmと極めて厚い土器である。紋様は、口唇先端頂部に施され、外側から見て内面側に右下りの斜位に刻み目が、外面側には右上りの斜位の刻み目が各々刻み目の右端が接する寸前ほど近くまで施されている。刻み目の長さは、甕形土器(A類)(B類)いずれに施された刻み目より長く、短いものでも長さ1.1cmを測り、長いものでは1.4cmを測る。また、刻み目は深く、刻み目の中央に稜が入っているのが観察される。

2-7. 矢羽根状刻み目紋甕形土器(A類)の型式学的変化

本貝塚から出土した矢羽根状刻み目紋土器の3種類の器種のうち、複数の層にわたって出土が見られるのは、甕形土器(A類)のみである。そこで、ここでは甕形土器(A類)のみを取り上げて層位に基づきその型式学的変化を考えてみたい。

まず、最下層である第XII層出土資料(図8-1)は、先にも記したようにやや小ぶりで肥厚した口縁部外面が平坦部分を持っているのが特徴である。こうし

た特徴は、第 XI 層出土資料（図 8-2）と異なるので、一つの型式として設定できるであろう。そこでこれを a 式とする。ただし、施紋部位が口縁部外面全体に及ぶことは、第 XI 層出土資料、第 IX 層出土資料と共通する。

次に第 XI 層出土資料（図 8-2）と第 IX 層出土資料は、口縁頂部がやや幅広くなり、口縁部外面がふくらみ頸部でしまるという点が共通し、口唇頂部及び口縁部外面全体に刻み目紋が施されるという点も共通する。よってこうした特徴を持つものを b 式とする。ただし、刻み目の段の数は、第 XI 層出土資料が 6 段で、第 IX 層出土資料が 5 段であることは異なっている。

次に、第 IV 層出土資料（図 8-6）は、口唇先端部の幅が狭くなり刻み目がこの部分に施されなくなり、肥厚した部分の厚みも厚くなる点で、第 XI 層出土資料や第 IX 層出土資料と異なっている。また、施文部位が肥厚した口縁部外面の中位よりやや下に限定されている点も第 XI 層出土資料や第 IX 層出土資料と異なっている。よってこうした特徴を持つ資料を c 式とする。

これらをまとめるなら、矢羽根状刻み目紋土器（A 類）は、本貝塚における出土層位をもとに、a 式から b 式へ、そして b 式から c 式へと変化したと考えられよう。

3. カガヤン川下流域、ラロ貝塚群中の他の貝塚出土の矢羽根状刻み目紋土器

カガヤン川下流域には、前章で見たバガッグ I 貝塚の他に矢羽根状刻み目紋土器が出土した遺跡が三箇所存在する。すなわち、ラロ町、カトゥガン (Catugan) 貝塚、ドンブリケ (Dumbrique) 地点、ラロ町、セントロ (Centro) 村、ダビッド (David) 貝塚、カマラニウガン (Camalaniugan) 町、ドウゴ (Dugo) 村、コルテス (Cortez) 貝塚である。これら 3 箇所の遺跡は、いずれもバガッグ I 貝塚よりも下流の地域（北側）に所在する。ここでは、バガッグ I 貝塚に近い方、すなわち南側の遺跡から順に取り上げ、遺跡の位置、調査、層序を簡略に概観した上で出土資料を層ごとに見ていく。

3-1. カトゥガン貝塚ドンブリケ地点の矢羽根状刻み目紋土器

3-1-1. カトゥガン貝塚ドンブリケ地点の発掘調査

カトゥガン貝塚は、カガヤン川を 20km 程溯った地点のカガヤン川西岸に位置している。この地点でカガヤン川は、川中にラフ (Lafu) 島という小島があるため、カガヤン川本流とマラナオ (Malanao) 川に分かれる。遺跡は、このマラナオ川に面する自然堤防上に立地する。この遺跡は、1996 年筆者が中心となって発掘調査を行い (Tanaka 1998a)、2001 年には東京外国語大学の小川英文が中心になって発掘調査が行われた (小川 2003)。筆者の発掘では、マラナオ川に面した崖沿いの地点に 1x2m の発掘坑を設定して発掘を行い (Tanaka 1998a)、2001 年の小川英文の発掘では、崖から内陸に 7m 離れた地点で 2x2m の発掘坑を設定して発掘を行った (小川 2003)。また、層序については、筆者の発掘では、第 I 層から第 V 層までの 5 枚の層を確認したが、小川英文の発掘では、表土層の下に 1 層から 5 層までの 5 枚の層を確認した。両者の層の対応関係は、筆者の第 I 層が小川の調査の表土層であり、筆者の調査の第 II 層が小川の調査の 1 層と 2 層で、3 層以下の認識は同じである。すなわち、筆者は、第 I 層：混貝黒色土層（表土層）、第 II 層：混土貝層、第 III 層：貝混入褐色シルト層、第 IV 層混土貝層、第 V 層：褐色粘土層と分け (Tanaka 1998a: 153-155)、小川は、表土：破碎貝と完形貝をまばらに含む黒色土層、1 層：完形貝と暗褐色土の混貝土層、2 層：破碎貝と暗褐色土の混貝土層、3 層：黄褐色粘土質シルト層、薄い破碎貝層を内部に含む、4 層：破碎貝と黄褐色シルト混貝土層、5 層：黄褐色粘土質シルト層と分けた (小川 2003: 25)。

3-1-2. カトゥガン貝塚ドンブリケ地点出土の矢羽根状刻み目紋土器

矢羽根状刻み目紋土器は、筆者の発掘では、第 IV 層から 1 点（図 9-1）、小川の発掘では 4 層から 4 点（図 9-2~5）が出土した。これら 5 点は、いずれも外側に肥厚した口縁部と締まった頸部を持ち、バガッグ I 貝塚出土資料の A 類と同じ範疇に属するものである。また、型式学的には、口縁部外面に面を作らず、肥厚した外面全体に施文が及ぶことからバガッグ I 貝塚の b 式に近いと考えられるが、バガッグ I 貝塚の b 式は、口唇部の刻みを有するが、カトゥガン貝塚の資料

で口唇部に刻みを有するものは、図 9-5 の資料のみで、他は見られない点は、ある程度の時間差を感じさせる。

一方、2 層からは、小川の発掘によって、甕形土器（図 9-6）1 点と鉢形土器（図 9-7）1 点の合計 2 点が出土した。甕形土器は、A 類と異なり、幅広の口唇部を有し、口縁外面は直線的で、厚手の口縁部が作られている。幅広の口唇頂部は、中央に稜をとり、この稜をはさんで斜位に刻み目が施され、外側から見て左開きの矢羽根状の紋様が形作られている。こうした形態は、これまで見られず、新しい器種として、矢羽根状刻み目紋甕形土器 C 類と命名したい。一方、鉢形土器（図 9-7）は、口唇先端部が内面で斜めの下り傾斜を持った資料で、口唇先端部から胴部にかけてまっすぐにすばまっている。こうした形態もまた、これまで見られず、新しい器種として、矢羽根状刻み目紋鉢形土器 B 類として命名したい。紋様は、口唇部内側の平坦面に外側から見て左開きに組み合わされた 2 組 4 列の刻み目が口縁周に沿って施されている。また、組と組の境は沈線で区画される他、紋様が破片の途中で止まっている境にも沈線が入れている。

3-2. ダビッド貝塚出土の矢羽根状刻み目紋土器

3-2-1. ダビッド貝塚の発掘調査

ダビッド貝塚は、カガヤン川河口から 17km ほど溯った川の東岸に位置する（図 3）。この地点は、かつてラロ町の中心であり、葉巻たばこを生産していたタバカレラに接する地点である（小川 2003: 41）。遺跡は、カガヤン川の自然堤防上に立地し、標高は 8m（小川 2003:41）である。本遺跡の調査は、小川が中心になって 2001 年に 2x2m の発掘坑を設定して行われた（小川 2003: 43）。その結果、表土層の下に 5 枚の層が確認された。すなわち、表土：破砕貝と完形貝を含み、地表面からの攪乱を受けた暗褐色土層、1 層：完形貝と暗褐色土の混土貝層、2 層：完形貝と破砕貝に黄褐色シルトが混入した混土貝層、3 層：黄褐色粘土質シルト層、4 層：破砕貝と黄褐色シルトの混土貝層、5 層：黄褐色粘土質シルト層（小川 2003: 43）である。

3-2-2. ダビッド貝塚出土の矢羽根状刻み目紋土器

本貝塚からは、矢羽根状刻み目紋土器が 1 点（図 9-8）のみ出土している。すなわち、4 層から 1 点の

出土である。器形は、口縁部が外反し、外面が肥厚して頸部でしまるもので、矢羽根状刻み目紋甕形土器 A 類に属すると考えられる。また、刻み目は、外面の肥厚部分全体に及び 5 段の刻み目からなっている。また、外面に面をとるような部分はないため、型式学的には b 式に近いといえる。

3-3. コルテス貝塚出土の矢羽根状刻み目紋土器

3-3-1. コルテス貝塚の発掘調査

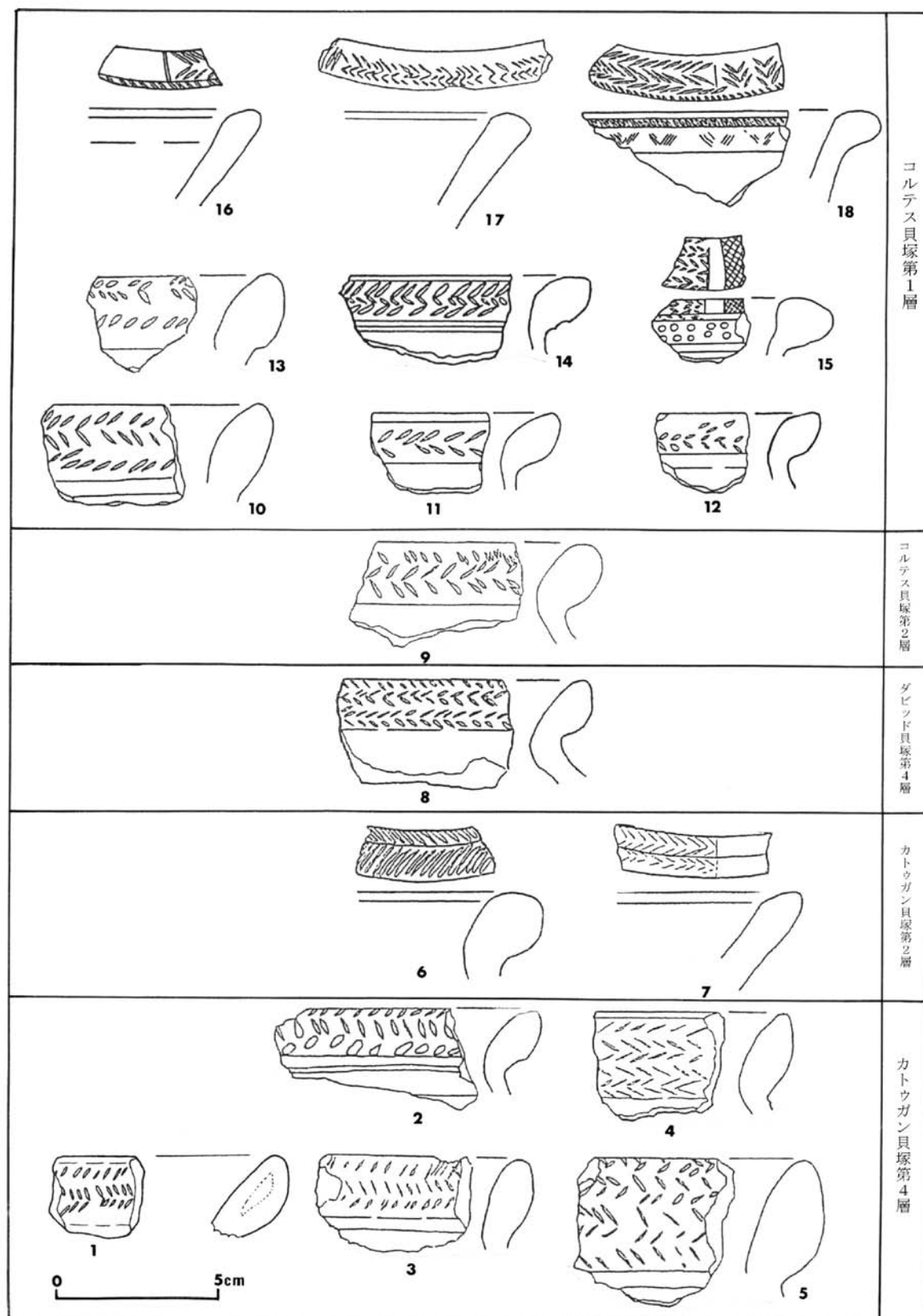
ドゥゴ村コルテス貝塚は、カガヤン川を 5km ほど溯った川の東岸に位置する（図 3）。遺跡は、カガヤン川の自然堤防上に立地し、標高は 7m（小川 2003: 31）である。本遺跡の調査は、小川英文が中心になり 2001 年に貝塚最頂部に 2x2m の発掘坑を設定して行われた（小川 2003: 31）。発掘の結果、約 50cm の厚さの表土層の下に 1 層と 2 層の 2 枚の層を検出した。すなわち、表土：破砕貝と完形貝を含み、地表面からの攪乱を受けた暗褐色土層、1 層：完形貝と褐色土の混土貝層、2 層：黄褐色粘土質シルト層（小川 2003:31）である。1 層は厚さ 1m、2 層は深度 1m まで掘り下げている（小川 2003:31）。

3-3-2. コルテス貝塚出土の矢羽根状刻み目紋土器

発掘の結果、矢羽根状刻み目紋土器は、第 2 層最上部から 1 点、第 1 層から 9 点が検出された。

第 2 層出土の矢羽根状刻み目紋土器（図 9-9）は、口縁部が外反し外面が肥厚し、頸部で締まる形態のものである。紋様は、肥厚した口縁外面全体に 3 段の刻みからなる矢羽根状刻み目紋が施されている。型式学的には、紋様が外面全体に及ぶこと、外面に面取りした部分がみられないことから、b 式の範疇で捉えられよう。

1 層出土の矢羽根状刻み目紋土器は、甕形土器が 6 点（図 9-10~15）と鉢形土器が 3 点（図 9-16~18）である。甕形土器 6 点の内の 5 点（図 9-10 ~ 14）は、口縁部が外反し、外面が肥厚して頸部でしまる形態を持ち、矢羽根状刻み目紋甕形土器 A 類の範疇に入るものである。型式学的には、（図 9-10,13,14）の資料が外面全体に刻み目が施され、かつ外面に面取りをしていない為、b 式の範疇で捉えられる一方で、図 9-11,12 の資料は、施紋が外面の一部に限られるため、c 式の範疇に入るものと考えられる。また、図 9-15



(1: Tanaka 1998a) (2-18: 小川 2003)

図9 カトゥガン貝塚、ダビッド貝塚、コルテス貝塚出土矢羽根状刻み目紋土器

の資料は、外側に厚手に膨らんだ口縁部を持つ甕形土器である。これは、これまで見た資料に見られない形態を持っているので、矢羽根状刻み目紋甕形土器 D 類と命名しておきたい。紋様は、外面の中程に稜を取り、この稜の上下に紋様が施されている。すなわち、稜より上側には、無紋帯を中央に挟み、外側から見て左側は、刻み目紋を口縁周に沿って 7 段配して矢羽根状の紋様を作出した紋様帯を作り、右側は、細い沈線によって格子状の紋様帯を作出している。一方、稜より下側には、小さな円形の刺突紋が 2 段に亘って配されている。

一方、鉢形土器（図 9-16~18）は、3 点である。そのうち、図 9-16, 17 の資料は、口唇部内面に平坦面を作り、口唇部から胴部にかけてまっすぐにすぼまる形態のものである。図 9-16 の資料は、口唇先端部が尖り、図 9-17 の資料は、口唇先端部が丸味を持っている。口唇先端部が尖る方（図 9-16）は、カトゥガン貝塚第 2 層出土の鉢形土器（図 9-7）に形態が類似する。それ故、矢羽根状刻み目紋鉢形土器 B 類に入ると考えられる。一方、口唇先端部が丸味を持つ図 9-17 の資料も、口唇部内面に平坦面を作り、胴部にかけてまっすぐにすぼまる形態から、矢羽根状刻み目紋鉢形土器 B 類の範疇にいて考えることができるであろう。紋様は、図 9-16 の資料が、口唇部外面に短い刻み目を 1 段施し、内面の平坦面に 2 段の刻み目を傾斜方向を変えて施すことによって矢羽根状の紋様を作出している。ただし、この矢羽根状紋様は、全体にわたるものではなく、沈線で区画された一部に施され、外側から見て破片の左側は無紋である。また、図 9-18 は、口縁部が外に張り出した鉢形土器で、張り出した部分の頂部が丸味を持ちながらも幅広になる。この形態もこれまでにみられないものであるので、ここで矢羽根状刻み目紋鉢形土器 C 類と命名しておきたい。紋様は、この張り出し部分の頂部に刻み目紋が施され矢羽根状の形を作出している。すなわち、口縁部外面に短い刻み目を施した後、外側から見て破片に左側には、口縁周にそって 3 段の刻み目を段ごとに傾斜方向を変えて施すことによって矢羽根状の紋様が作出され、一方、破片の右側には、口縁周に対して縦位に内面の中心に向かって下開きの八の字形になるよう組み合わせた刻み目紋が 3 組ずつ施されている。

3-4. カトゥガン貝塚、ダビッド貝塚、コルテス貝塚出土の矢羽根状刻み目紋土器

以上、3 章では、三つの貝塚の遺跡ごと、層ごとに矢羽根状刻み目紋土器の出土資料を概観した。ここでは、その結果を簡単にまとめておきたい。

カトゥガン貝塚では、4 層で 5 点、2 層で 2 点の出土例がみられた。4 層のものは、全て甕形土器 A 類 b 式に属し、2 層のものは、甕形土器 C 類、鉢形土器 B 類に属する。また、層位的関係から、甕形土器 A 類 b 式は、甕形土器 C 類や鉢形土器 B 類より古いといえる。

ダビッド貝塚では、4 層から甕形土器 A 類 b 式 1 点のみの出土であった。

コルテス貝塚では、2 層から甕形土器 A 類 b 式 1 点のみの出土であった。一方、1 層からは、甕形土器 A 類 b 式 3 点、甕形土器 A 類 c 式 2 点、甕形土器 D 類 1 点、鉢形土器 B 類 2 点、鉢形土器 C 類 1 点の出土であった。また、層位的関係から甕形土器 A 類 b 式は、甕形土器 A 類 c 式、甕形土器 D 類、鉢形土器 B 類、鉢形土器 C 類と時間的に平行することもあるが、古くなることもあるといえる。また、この点は、バガツグ I 貝塚の層位で確認された甕形土器 b 式が c 式に先行するという知見を裏付ける。

次に台湾側の資料をみていきたい。

4. 張光直による台湾南部鳳鼻頭遺跡の発掘調査と矢羽根状刻み目紋土器

4-1. 張光直による台湾南部鳳鼻頭遺跡の発掘調査

鳳鼻頭遺跡（図 1）は、台湾南部の高雄県林園郷に位置し、鳳山丘陵の南端部に立地する先史遺跡である。遺跡の立地する丘陵の南側は、沖積平野となっており、平野を走る幹線道路と丘陵南端部の最高地点の比高は、約 39cm (Chang 1969:1-9) である。また、この丘陵南端部から南の海岸線までの距離は、600 ~ 700m 程 (Chang 1969:19) である。また、本遺跡の名称である鳳鼻頭は、遺跡の立地する鳳山丘陵の南端部が、鳳凰の鼻のような形をした小丘陵の複合からなっていることに由来する (Chang 1969:19)。

本遺跡は、金子寿衛男によって 1944 年に発見され、戦時中、この地域に派兵された坪井清足によって調査された。

ここで紹介する張光直による発掘調査は、1965 年

1月8日から2月27日にかけて、イエール (Yale) 大学人類学科並びに同大学ピーボディ自然史博物館、そして、国立台湾大学考古学人類学科の共同調査として行われたものである。調査は、遺跡の立地する丘陵南端部の6つの地点 (B、K、N、P、S、Vの各地点) で発掘調査が行われ、7つの地点 (E、M、Q、R、T、U、Sの各地点) で集中的な踏査が行われた。発掘調査が行われた6つの地点の中で最も良好な層序が確認されたのがK地点である。それゆえ、ここでは、K地点における堆積状況と文化層について張光直の報告 (Chang 1969) に従ってみておきたい。

K地点は、丘陵南斜面の中央部に位置し、発掘調査地点は、道と北側の墓地の間にあり、豆とサツマイモ畑として利用されていた所であった。発掘坑は、2×2mの大きさのものが3箇所設定され、西から東へかけて、K-1、K-2、K-3と命名された。このうち、K-1とK-3は、岩盤まで発掘されたが、K-2は、貝と土壌を採集するための50cm×50cmの柱状サンプル採集だけであった。発掘を行ったK-1は、320cm、K-3は、370cmの堆積があることが判明した。また、両者とも耕作土層、第1層、第2層、第3層、第4層の5つの層からなることも明らかになった。以下各層の概要を記す。すなわち、耕作土層は、2次堆積土とされ、発掘削のすぐ南にあった通信トレンチを掘削した際の上げ土とされた。第1層は、明黄褐色を呈し、堅く、石灰岩の破片並びに、小型の多種の貝を多数含む層である。第2層は、第1層と第3層の間の過渡期的な層とみられるもので、明褐色を呈し、しまりは、いくぶんゆるくやわらかい。また、含まれる貝は、いくぶん少なめである。そして、第3層は、上部と下部に細分され、上部は暗褐色を呈し、黄色味を帯び堅くなる。また、上部では大きいが少ない種類の貝が混入する。また、上部、下部を通じて土の質は、かなり砂質で、やはり上部、下部を通じて滑らかな大きな礫が混入する。そして、第4層は、南壁沿いのくぼみにおいてのみ出現する層である。赤味のある砂利混じりの土からなる層で、石灰破片と河原石が混入している。

これらの層と出土土器の関係をみると、第4層から出土するのは、縄蓆紋土器のみで、出土数もまばらである。一方、第3層下部からは、専ら赤色土器 (精製赤色土器) が出土し、上部からは、灰色土器が優勢

に出土する。また、上部では砂質赤色土器も出土する。また、これら灰色土器と砂質赤色土器は、第1層、第2層においてもみられる。また、同様に、彩紋土器と黒色土器も第1層、第2層、第3層上部で出土した。また、発掘の便宜からK地点の各層は、細分された。すなわち、K-1地点では第1層が厚さ45cm、40cm、35cmの各々1a層、1b層、1c層に、第2層が厚さ25cm、15cmの2a層と2b層に、第3層が厚さ50cm、15cm(北壁沿い)、35cm(南壁沿い)の3a層、3b層、3c層に区分された。一方、K-3地点では、第1層が厚さ20cm、30cm、20cm、20cm、20cmの1a層、1b層、1c層、1d層、1e層に、第3層が、厚さ25cmの3e層と厚さ10cmの3i層を除き全て20cmずつの3a～3h層まで細分された。

4-2. 鳳鼻頭遺跡K地点のC14年代測定値

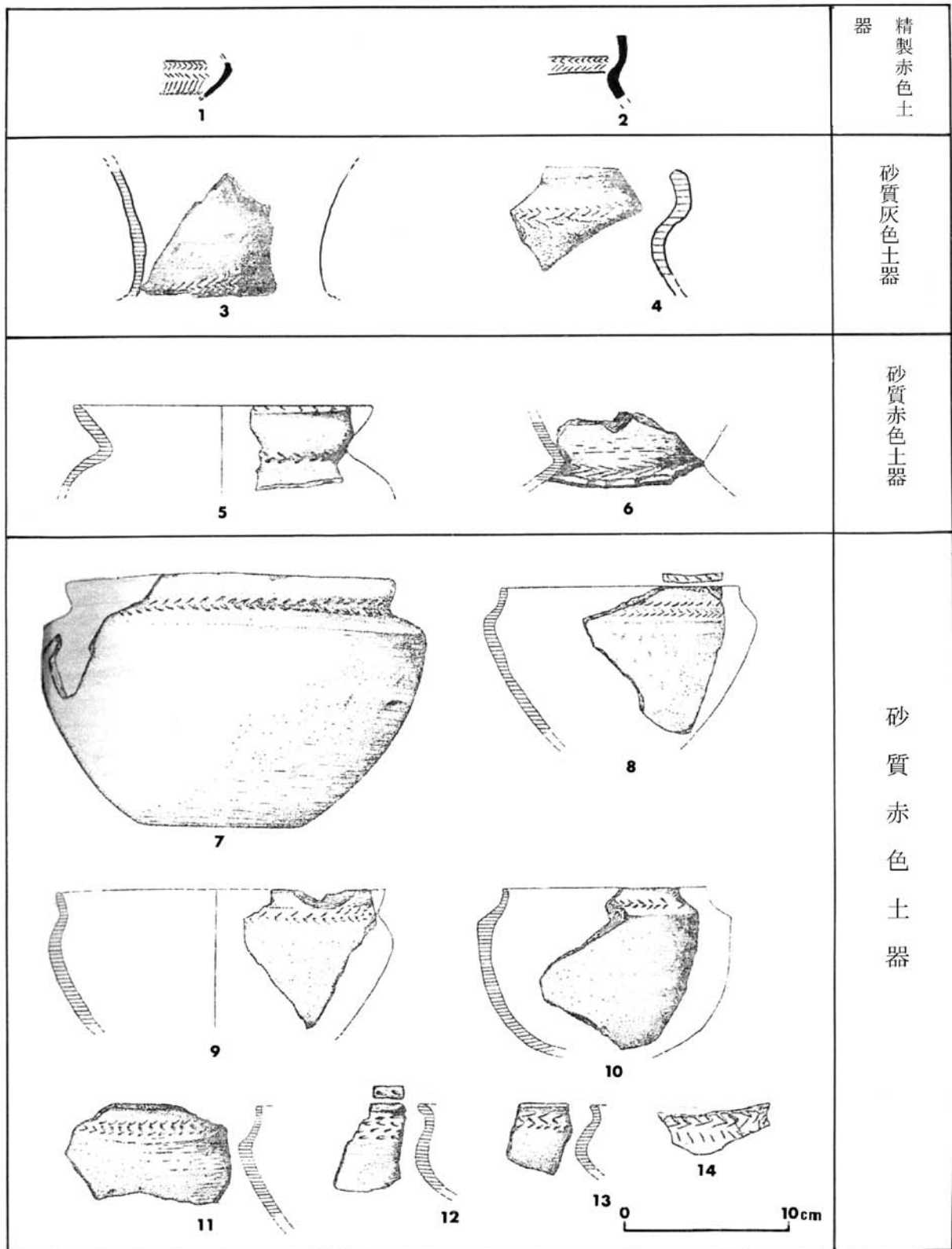
K-1の第2層からの貝によって2440±100 B.P. (Y-1577) という年代測定値が、K-1の第3層からの貝によって2670±80 B.P. (Y-1584) という年代測定値が、K-3の3d層からの貝によって2670±60 B.P. (Y-1648) という年代測定値がえられている (Chang 1969:50)。

4-3. 鳳鼻頭遺跡出土の矢羽根状刻み目紋土器

鳳鼻頭遺跡出土の土器は、張光直の報告では、縄蓆紋土器、精製赤色土器、砂質赤色土器、砂質灰色土器、黒色土器、彩紋土器に分けて記述されている (Chang 1969:55-59, 81-105.)。これらの土器群の中で矢羽根状刻み目紋土器がみられるのは、縄蓆紋土器、精製赤色土器、砂質灰色土器、砂質赤色土器、黒色土器の5種である。それゆえ、ここでは、張光直の分類にしたがって、主要な土器の範疇ごとに矢羽根状刻み目紋の土器の資料を見ていくことにする。

4-3-1. 精製赤色土器の中の矢羽根状刻み目紋土器

精製赤色土器の中の矢羽根状刻み目紋土器は、2点がある (図10-1,2)。このうち (図10-1) は、甕形土器の頸部破片である。“く”の字形に強く屈曲した形態の頸部である。横位に4段の刻み目を列ごとに刻み目の向きを変えて施すことによって矢羽根状の刻み目紋を作出している。上から1段目と3段目が右下りの刻み目で、2段目と4段目が左下りの刻み目である。また、4段目の刻み目はやや長めである。



(Chang 1969 より)

図 10 台湾、鳳鼻頭遺跡出土の矢羽根状刻み目紋土器



1. 鳳鼻頭遺跡遠望



2. 鳳鼻頭遺跡説明板



3. 鳳鼻頭遺跡時期別説明板（大埕坑文化層）



4. 鳳鼻頭遺跡時期別説明板（牛稠子文化層）



5. 鳳鼻頭遺跡時期別説明板（鳳鼻頭文化層）



6. 鳳鼻頭遺跡丘陵南西側マンゴー畑

写真 2 台湾南部高雄鳳鼻頭遺跡の踏査 (1)



1. 鳳鼻頭遺跡南西側丘陵頂部



2. 鳳鼻頭遺跡南西側丘陵頂部から南側を望む



3. 鳳鼻頭遺跡南側斜面



4. 鳳鼻頭遺跡南側斜面（拡大）



5. 丘陵南側斜面から丘陵内奥部へ向かう道



6. 丘陵内奥部、道沿い（西側）

写真3 台湾南部高雄鳳鼻頭遺跡の踏査(2)



1a



1b



2a



2b



3a



3b

写真4 台湾南部高雄鳳鼻頭遺跡採集矢羽根状刻み目紋土器

一方、(図 10-2) は、広口の甕形土器の口縁部から胴部上半部にかけての破片である。口縁部は頸部の付け根からほぼまっすぐに立ち上り先端部にかけて徐々に厚くなる。一方、頸部の付け根から下は、まず下り傾斜になり肩部で屈曲し、丸味を持った胴部になる。また、頸部の付け根から肩部の屈曲部までの長さは短い。紋様は、この頸部の付け根から肩部の屈曲部までの部位に施されている。横位 3 段の刻み目を列ごとに刻みの傾斜方向を変えて斜位に上部施し、矢羽根状の紋様を作出したものである。刻み目の傾斜は、第 1 段目と第 3 段目が左下りの傾斜で、第 2 段目が右下りの傾斜である。精製赤色土器は、第 3 層下部で卓越されるとされるが、集計表 (Table 14) では第 1 層から第 3 層上部までも各層で出土していることが明らかである。そのため、この 2 点の土器の出土層を特定することができない。

4-3-2. 砂質灰色土器中の矢羽根状刻み目紋土器

砂質灰色土器中の矢羽根状刻み目紋土器は、2 点、(図 10-3,4) である。このうち、(図 10-3) は、甕形土器の口縁部から頸部にかけての破片である。口唇先端部は欠損しているが、頸部屈曲部から朝顔形に外にひらいて立ち上り、その高さは、比較的に高い。紋様は頸部屈曲部外面に施されている。すなわち、横位 3 段の刻み目を列ごとに刻み傾斜方向を変えて斜位に施し、矢羽根状の紋様を作出したものである。刻み目紋の傾斜は、第 1 段目と第 3 段目が左下りの傾向で、第 2 段目が右下りの傾斜である。

4-3-3. 褐色土器中の矢羽根状刻み目紋土器

褐色土器中の矢羽根状刻み目紋を持つものは、外反する口縁部を持ち頸部で強くしまり胴部では球形にふくらむと思われる甕形土器 (図 10-5,6) と外反するか内湾しつつ立ち上がる口縁部を持ち頸部でのしまりが弱く広口の口縁部を持ち肩部で稜を作った後、すばまる鉢形土器 (図 10-7~13) と前二者のいずれに入るか明確ではない頸部破片 (図 10-14) がある。

これらを概観するなら、張らによる発掘で出土した矢羽根状刻み目紋土器は甕形土器、鉢形土器の外面頸部、肩部への施紋が主体といえる。

5. 台湾南部、鳳鼻頭遺跡の踏査と採集土器

5-1. 鳳鼻頭遺跡の踏査

2010 年 4 月 3 日、筆者と台湾大学人類学科修士課

程学生、劉俊昱は、台湾南端の屏東県に所在する墾丁遺跡の踏査を行った後、本遺跡を踏査すべく、一路北へ向かった。墾丁からは、恆春を抜け、西海岸の車城に出、そこから右手に中央山脈の山裾、左手に海を見ながら国道 26 号線、そして、国道 1 号線を北上した。道が中央山脈の山裾から離れて広い平野部に入ると、まもなく北へ向う 1 号線と北西の海岸沿いを走る 17 号線に分かれる。我々は、17 号線の方に入り、広々とした沖積平野に霧果の果樹園が広がる林邊を抜け、屏東県と高雄県の県境となっている高屏溪の (南) 川岸にたどりついた。対岸は、目指す遺跡のある林園であるが、河口に一番近い雙園大橋は、この日工事中で通れず、やむなくしばらく北上して萬大大橋を渡って高雄県に入った。川を渡った後は、再度南下して林園の町に入ると、西側遠方から北側遠方にかけて連なる頂部の比較的平坦な丘陵が見えた (写真 2-1)。鳳山丘陵である。丘陵南端部に近づくにつれて丘陵に接する平野部は、小さな公園のような形で整備されていた。そして、そこには國定遺址という表示のある新しい遺跡の説明板 (写真 2-2) と時期ごとの出土遺物及び文化段階の説明看板 (写真 2-3~6) が建てられていた。そして、この公園の東側には道が走り、道を挟んだ反対側には、新しい住宅群が並んで建っていた。

遺跡の立地する丘陵の踏査は、まず、南西側に回って丘陵の頂部に登る道を捜した。丘陵の南西部は、マンゴーの果樹園 (写真 2-6) となっていたため、平地部に車を止め、果樹園となっていた丘陵斜面を歩いて登った。果樹園は、丘陵の頂部下 7~8 cm のところで終わっていて、あとは、所々石灰岩の露出したところに木と草の生える急峻な崖 (写真 3-1) となっていたため、これを登り頂部に立った。丘陵頂部からは、眼下の平野に建ち並ぶ家々やビルの向うに、海が見えた (写真 3-2)。しかし、この南西部分では、果樹園の中で数点の土器胴部片がみられただけであった。そこで、今度は、丘陵の南縁沿いに登ってゆく道をたどることにした。緩やかな上り坂を登ってゆく途中、左手の丘陵が、藪で覆われた所から果樹園に変わった付近の道沿いに多くの土器の散布がみられた (写真 3-3,4)。また、この緩やかな坂道の崖下の平地に作られた果樹園においても土器片、貝片の散布がみられ、口縁破片を中心に採集を行った。そして、さらに、この南沿部の道をたどってゆくと、道は丘陵側に左折し

て丘陵の中に入り（写真 3-5）、上り坂が一度下り再び上り坂となる所があった。その地点の丘陵側は、急な斜面になっていて、バナナが植わっていたが、この斜面部に多数の土器片が散っており（写真 3-6）、ここでも口縁破片を中心に土器片の採集を行った。

この踏査によって、土器 46 点、貝片 11 点、石片 2 点を採集した。これらのうち、土器片の部位ごとの内訳は、口縁部破片 24 点、頸部破片 2 点、胴部破片 18 点、圈足破片 2 点である。また、これらのうち、紋様を有するものは、口縁部破片が 4 点と頸部破片が 1 点、胴部破片が 3 点である。口縁部破片の紋様は、1 点が斜行した刻み目紋で、3 点が矢羽根状刻み目紋である。一方、頸部破片の紋様は、頸部屈曲部外面に横位に隆帯を施したもので、胴部破片の紋様は、叩き板による成形痕を残したものである。そのため、ここでは、矢羽根状刻み目紋を有する口縁部破片 3 点のみを取り上げる。

5-2. 鳳鼻頭遺跡採集矢羽根状刻み目紋土器（写真 4-1a,b-3a,b）

矢羽根状刻み目紋土器 3 点の採集地点は、1 点（写真 4-1a,b）が、丘陵南縁部側の緩斜面の道を登って左折し、丘陵の中に入ったところの道路わきの丘陵斜面に土器片が集中して散布するところである。一方、他の 2 点（写真 4-2a,b, 3a,b）は、丘陵南縁部の緩やかな上り坂の道の平野側のコンクリートで固めた崖面の下の果樹園で採集したものである。では、各々の土器の色調、胎土、形態、紋様の特徴を概観する。

（写真 4-1a,b）は、外面の色調が黒色で、頂部及び内面の色調が灰色のものである。胎土は、芯まで一様に灰色で、肌目が細かく、微粒の白砂粒と黒雲母片を含む。形態は、小破片であるため確定するのが困難であるが、甕形土器あるいは鉢形土器の口縁部破片で、口縁部上端部は平坦面を作出し、外面は外側にやや膨らんだ後、すばまりかけた所で破損している。一方、内面の形態は、頂部に接する部分が肥厚し、その下は内湾している。紋様は、平坦な頂部と外面に斜行刻み目紋が施されている。頂部の紋様は、斜行刻み目紋を向い合うように配したもので矢羽根状の連続紋様を作出している。一方、外面の紋様は、やはり短い刻み目紋を斜行させて横位に 5 段施したものである。この 5 段の斜行刻み目紋は、上から見て第 1 段目、第 3 段目、

第 5 段目が右下がりの刻み目の段で、第 2 段目と第 4 段目が左下がりの刻み目の列で、第 2 列目と第 3 列目、第 4 列目と第 5 列目は、それぞれ右開きの矢羽根状の紋様を形作っている。

（写真 4-2a,b,3a,b）は、粗い胎土を持った赤褐色の壺形あるいは甕形土器である。色調は、写真 4-2a,b が内外面ともやや黄色味がかかった赤褐色であるのに対して、写真 4-3a,b は、4-2a,b よりもいくぶん赤味が強い。胎土は、写真 4-2a,b, 3a,b ともに粗く、粒径 1mm 程の灰色鉱物粒、赤褐色鉱物粒、微粒の灰色物粒、赤褐色鋭物粒を多量に含む。また、胎土の色調は、表面下芯まで赤褐色である。形態は、2 が口唇上端部が平坦で、ゆるく外反した口縁部を持ち、頸部で締り、胴部上半部に明瞭な稜を作る屈曲部を有している。一方、3 は、口唇先端部が同様に平坦であるが、口縁部はほぼ垂直に立ち上り、頸部下の胴部は外側にふくらむものである。胴部上半部の屈曲はゆるやかで、明瞭な稜を作出するものではない。紋様は、2、3 ともに口唇先端部と頸部屈曲部及びその直下に斜行刻み目紋を施している。この紋様は、口唇先端部のものが、刻みを斜めに向かい合うように施し、右開きの矢羽根状の紋様を形作るものである。一方、頸部屈曲部から頸部直下に施された紋様は、横位 2 段の斜行刻み目紋で、右開きの矢羽根状の紋様を形作っている。一方、3 の紋様は、口唇先端部に施された紋様が、一列の斜行刻み目紋で、頸部屈曲部からその直下に施された紋様が、横位の 3 段の斜行刻み目紋で、2 段目の刻みと 3 段目の刻み目が矢羽根形の紋様を形作っている。

若干の検討とまとめ

カガヤン川下流域出土の矢羽根状刻み目紋の概観によって矢羽根状刻み目紋はカガヤン川下流域には甕形土器 A 類、B 類、C 類、D 類の 4 種と鉢形土器 A 類、B 類、C 類の土器があることが明らかになった。このうち甕形土器 A 類は、外面全面刻み目で、外面を平坦に面取りする a 式、全面刻み目で外面を面取りせず、一部口唇頂部刻み目が形成される b 式、外面の部分施紋になる c 式に分けられ a 式から b 式を経て c 式への変化がバガグ I 貝塚の出土層位から裏付けられた。一方、鳳鼻頭遺跡の採集資料のうち赤褐色で頸部屈曲部に矢羽根状刻み目紋を有する資料（写真 4-2,3）は、カガヤンの貝塚出土資料に類例を見出し

えなかった。一方、口縁外面のふくらんだ部分に矢羽根状刻み目紋を配する(写真 4-1)の資料は、カガヤン川下流域の矢羽根状刻み紋甕形土器 A 類 b 式と類似する。また、口唇頂部に刻み目が入る点も A 類 b 式に類似するといえる。

一方で、写真 4-1a,b の資料は、内面が内湾しているが、カガヤン川流域の資料の A 類 b 式の内面は平坦で内湾する資料は見られない。こうしたことから両者の資料の間に影響関係を想定することは可能であってもまださらなる資料調査と検討が必要である。

文献

青柳洋治 (Aoyagi, Yoji)

- 1977 「研究史・ルソン及びその周辺諸島考古学」『日本民族と黒潮文化—黒潮の古代史序説』黒潮文化の会編 角川選書 91 角川書店: 187-199.
- 1979 「ルソン島の古代史探訪」『新・海上の道—黒潮の古代史探訪—』角川選書 103 角川書店: 108-125.
- 1983 “General survey in northern Luzon” In Shirakihara, K. (ed.) *Batan Island and Northern Luzon*: 69-87, 116-119, 157-161. University of Kumamoto, Kumamoto.

青柳洋治・田中和彦

- 1985 「カガヤン川流域の貝塚土器をめぐる二、三の問題」『上智アジア学』第 3 号: 81-129.

青柳洋治, Melchor Aguilera Jr., 小川英文, 田中和彦

- 1986 「カガヤン川下流域の貝塚」『上智アジア学』第 4 号: 45-91.
- 1988 「ラロ貝塚群の発掘」『上智アジア学』第 6 号: 63-104.
- 1991 「ラロ貝塚群の発掘 (3)」『上智アジア学』第 9 号: 49-137.

Bellwood, Peter

- 1978 *Man's Conquest of the Pacific*. Auckland: Collins.
- 1985 *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. Sydney: Academic Press.
- 1997 *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. Revised edition. University of Hawai'i Press.

Beyer, Henry O.

- 1947 “Outline review of the Philippine archaeology by islands and provinces.” *Philippine Journal of Science* 77(3-4): 250-390.

Chang, Kwang-Chih(張光直)

- 1969 *Fengpitou, Tapenkeng and the Prehistory of Taiwan*. Yale University Publications in Anthropology Number 73, Department of Anthropology, Yale University.

Fox, Robert B.

- 1970 *The Tabon Caves- Archaeological Explorations and Excavations on Palawan Island, Philippines-*. Monograph of the National Museum No.1, Manila.

Hung, Hsiao-chun(洪曉純)

- 2005 “Neolithic Interaction between Taiwan and Northern Luzon: The Pottery and Jade Evidence from the Cagayan Valley.” *Journal of Austronesian Studies* Vol.1, No.1: 109-132.

飯塚義之

- 2010 「台湾産玉(ネフライト)の拡散と東南アジアの先史文化」『海の道と考古学 - インドシナ半島から日本へ -』菊池誠一・阿部百里子編 高志書院: 51-65.

三原正三・小川英文・田中和彦・中村俊夫・小池裕子

- 2005 「フィリピン、ラロ貝塚群における剥片石器期～無文黒色土器群期の AMS¹⁴C 年代」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書 (XVI)』名古屋大学年代測定総合研究センター: 169-180.

野林厚志

- 2010 「台湾南科遺跡 4800 年前から 300 年前までの文化層が断続的に出現する大遺跡群」『考古学研究』225 号 考古学研究会: 92-94.

野上建紀・Alfredo B. Orogo・田中和彦・洪曉純

- 2005 「マニラ出土の肥前磁器」『金大考古』48 号 金沢大学考古学研究室: 1-5.

小川英文 (Ogawa, Hidefumi)

- 2000 “Discussion and Conclusion” In Hidefumi Ogawa (ed.) *Excavation of the Lal-lo shell middens*: 248-269.
- 2003 「ラロ貝塚群出土有文黒色土器群の型式学的編年研究」『東南アジア考古学』第 23 号: 23-57.
- 2004 「ラロ貝塚群出土土器群の型式学的編年研究」『長野県考古学会誌』第 105 号: 1-33.
- 2005 “Typological chronology of pottery assemblages from the Lal-lo shell middens in northern Luzon, Philippines.”『東南アジア考古学』第 25 号: 1-30.

Ogawa, Hidefumi and Melchor L. Aguilera, Jr.

- 1992 “Data report on the archaeological explorations in the lower Cagayan River, northern Luzon, Philippines.”『国士舘大学宗教・文化研究所紀要』第 10 号: 41-113.

Ronquillo, Wilfredo P.

- 1985 “Archaeological research in the Philippines, 1951-1983.” *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association*, No.6: 74-88, Manila.

Solheim, W. G.

- 1964a *The Archaeology of Central Philippines- A study chiefly of the Iron Age and its relationships-*. Monograph of the National Institute of Science and Technology No.10. Manila
- 1964b “Further relationships of the Sa-huynh-Kalanay Pottery Tradition.” *Asian Perspectives* 8, (1): 196-210.

田中和彦 (Tanaka, Kazuhiko)

- 1997 「カトゥガン (Catugan) 貝塚の発掘調査」『東南アジア考古学』第 16 号: 149-160.
- 1998a “Preliminary report of the archaeological excavation of Catugan shell-midden (Dumbrique site), Lal-lo, Cagayan,

- Philippines.”『千葉敬愛大学初等教育科紀要』第20号:149-178.
- 1998b 「ルソン島北部、ラロ貝塚群、バガッグI貝塚の発掘調査と若干の問題」『上智アジア学』第16号:171-211.
- 1999 “The archaeological excavation of Bangag I shell-midden, Lal-lo, Cagayan, Philippines.”『東南アジア考古学』第19号:71-92.
- 2002 *Ceramic Chronology in Northern Luzon: Typological Analysis of the Pottery from the Lal-lo Shell-middens*. Ph.D Dissertation. University of the Philippines.
- 2003 「ルソン島北部、カガヤン川下流域の貝塚遺跡に見られる居住の断絶と継続—河川の氾濫との関連で—」『情報環境研究』(敬愛大学環境情報研究所)第11号:83-99.
- 2004a 「ルソン島北部、鉄器時代貝塚の発掘調査—ラロ貝塚遺跡群、バガッグI貝塚の発掘調査—」『月刊考古学ジャーナル』520号:34-38.
- 2004b “The continuity and the gap of the occupation of shell-midden sites in the lower reaches of the Cagayan River, northern Luzon.” In V. Paz (ed.) *Southeast Asian Archaeology* Wilhelm G. Solheim II Festschrift: 158-183. Quezon City: The University of the Philippines Press.
- 2005 「「赤の時代」から「黒の時代」へ—ルソン島北部、カガヤン川下流域、ラロ貝塚群における新石器時代から鉄器時代の土器編年—」『上智アジア学』第23号:313-401.
- 2010 「フィリピンの先史時代」『海の道と考古学—インドシナ半島から日本へ—』高志書院:66-90.
- 山形真理子 (Yamagata, Mariko)
- 2006 “Inland Sa-Huynh Culture along the Thu Bon River Valley in Central Vietnam.” In E. Bacus, I Glover and V. Pigott (eds.), *Uncovering Southeast Asia's Past-Selected Papers from the 10th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists-*, 168-183. Singapore: NUS Press.
- 2010 「ベトナムの先史文化と海域交流」『海の道と考古学』菊池誠一・阿部百里子編 高志書院:30-50.
- Tsang, Cheng-Hwa (臧振華)
- 1998 「菲律賓呂宋島考古工作簡報」『東亞區域研究通訊』第六期:17-33.
- 1999 『臺灣考古』行政院文化建設委員會策劃出版
- 臧振華、李匡悌、朱正宜
- 2006 『先民履跡—南科考古發現專輯』南瀛叢書138 臺南縣政府
- 劉益昌
- 1992 「重要考古遺址資料表67 鳳鼻頭」『台灣地區重要考古遺址初步評估第一階段研究報告』中國民族學會專案研究叢刊(-):172-173.
- 1996 『臺灣的史前文化與遺址』臺灣省文獻委員會、臺灣史蹟源流研究會
- 2002 『臺灣原住民史 史前篇』國史館臺灣文獻館